

対談 常に変わらない幹と 時代に合わせた枝と

茶道裏千家十六代家元

千宗室さんに聞く

(一九八〇年大学文学部卒業)

期待を込めて贈られた、家元という「辞令」

八田 このたびは第十六代家元ご襲名、おめでとうございます。同志社としまして、本当に喜びでいっぱいです。

千 どうもありがとうございます。

八田 各界からもさまざまな期待が寄せられていると思います。現在の心境はいかがですか。

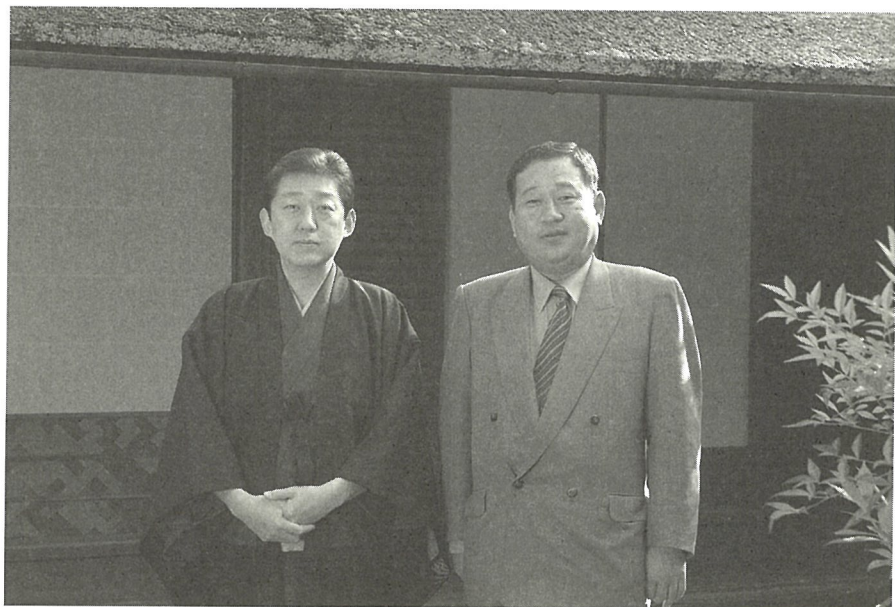
千 家元を継承しまして、今回のようなインタビューをお受けする機会が多い中、必ず皆さん、そうお尋ねになるのですが、私の気持ちは家元継承前から何も変わっていないのです。誠に申し訳ないのですけれど(笑)。

八田 変わっておられないといえますと…。

茶道裏千家若宗匠としてご活躍の千宗之さんが、二〇〇二年十二月二十二日の家元継承宣誓式をもって、十六代家元・千宗室を襲名されました。

このコーナーは時代の変化の中で京都に根ざし、「日本の伝統」を継承されている卒業生を紹介してきましたが、今回はその特別編として、八田英二大学長との対談をお届けします。

千 例えば、会社で昨日まで次長だった人が今日部長になったからといって、その人が突然変わったわけではありませんよね。部長にふさわしい人間になったとか、人間がごろりとひと皮むけたというわけではないと私は思います。そうではなくて、新しい役目をいただいたら、それにふさわしい仕事をしなさいという期待を込めた辞令を渡された：私はそんなふうに思っています。ですから私も若宗匠という立場になった時は、何年務めたら家元になれるとか、そういうことも考えておりませんでした。ただただ、若宗匠として毎日をしっかりと、責任をもって送っていけばそれでよい。若宗匠という長廊下を歩いていて、その延長線上で次の扉に手が届き、それを開けたら家元という居間に入った。そういうことじゃないでしょうか。もちろん責任が重くなるのは重々承知しておりますが。



対談は今日庵の又新軒で行われた

八田 四十歳代で家元を継承なさったという、その若さについて、どのように感じていらつしやいますか。

千 これも申し訳ないのですが、三千家（裏千家・表千家・武者小路千家）の歴史で、私が一番遅く家元を継承した人間なのです。また、若宗匠を二十年務めあげたというのも、私が一番長いのです。ですから新聞などでも若い若いと書いていただいているのですが、逆に一番年寄りの家元ができたと思つていただいたらいいんじゃないでしょうか。高齢化社会にちゃんと適応しています（笑）。

八田 十二月二十二日に行われた「家元継承宣誓式」ではどのような儀式が行われたのですか。

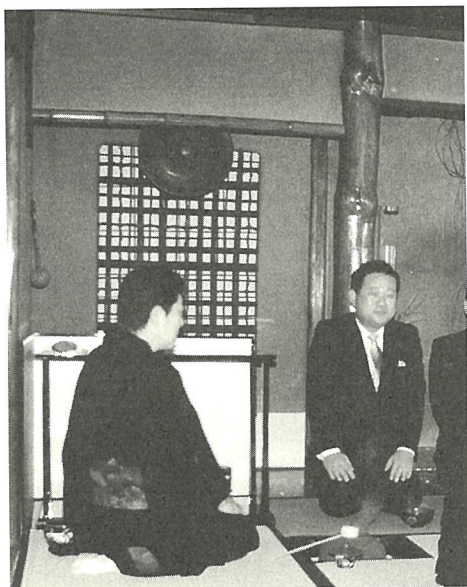
千 今日庵に利休御祖堂という部屋がございまして、桃山時代の利休居士の立像が祀られています。四百数十年にわたり、そこで私どもの先祖、その時代ごとにそこで修行をしている方々が日々拝礼してきました。その場所で、千家の菩提寺である大徳寺聚光院の住職、表千家と武者小路千家の家元、平安神宮宮司の九条家、私どもの最高諮問機関である老分、そして家族が見守る中で、利休時代から代々伝わる文書がすべて収められた「密参箱」を、利休居士像の前で先代家元より授与されまして、そのあとで宣誓文を読ませていただきました。そして九条様からそれについてのご確認のごあいさつ、表千家家元からはなむけのごあいさつをいただいた次第です。

八田 いよいよこれから裏千家十六代目として務めていかれるわけですが、裏千家の今、そして将来をどのように展開されるのか、抱負をお聞かせいただけますか。

千 この茶室（又新軒）をご覧になってみてください。天井

に太い梁が渡されていますね。一方の端が利休の時代で、反対側の端で私まで来たとしましよう。その間、幹の太さは変わっていません。この幹が利休の和敬清寂の精神、亭主と客との間に通う人間的な温もりです。そして梁の両側にたくさん竹がある。これを枝としましょう。常に変わらない幹から、その時代ごとに即応した趣向といましようか、それぞれの家元の考えてこられたものがあります。これが裏千家のお茶であるわけです。

三千家の紋はすべて独楽で統一されていますが、その独楽も少しずつ姿が違います。裏千家の独楽紋はいつも回っている独楽なのです。常に時代に合わせて敏感に行動しなさいと示唆されているように感じます。この茶室の立礼席にしても、十一代



1月の初釜には八田学長も招待され、
家元から濃茶を振舞われた

目家元の玄々斎という方が、明治維新の時に京都で博覧会が開かれた際、海外から来られたお客様に対して、せっかく開国したのにむりやり畳に座っていただくのは不自然かもしれない。そう言つて、この形を考案されたわけです。当時は相当批判もあったそうです。西洋かぶれとかね。玄々斎はそういう声にも負けず、新しい形を押し通されました。この立礼がずっと絶えることなく、むしろ逆に広まったのは、時代をよくご覧になった十一代の目の確かさがあつたからだと思っています。そして十二代と十三代の家元の時代には、それまで公開しなかった点前の法を出版し、女性にも門戸を開放し、学校や職場でも茶道を教えて普及に務められました。十三代は新島襄夫人の八重さんにもお茶を教えていたと聞いています。十四代は同志社出身で、海外に向けての最初の第一歩を築かれた。そして私の父である十五代が海外への普及に全力を注ぎました。全部この、太い幹は変わっていません。そこから枝がいつぱい出て、立派に葉を茂らせた。まだ私のところに枝は出ていませんし、今出るのは不自然かもしれませんね。でも、これから枝が出てくる要素は間違いなくあると思います。歴代の家元がつくつてこられたものはすべて、大なり小なり私は引き継ぐつもりです。そこに、自分なりに時代に合ったものを加えていけばいいのではないかと思います。

若い世代に広めていきたい「ネオ・ジャパネスク」

八田 なるほど、おっしゃるとおりですね。十六代目も海外での活動をさらに展開されるのですか。

千 私 は海外ではなくて、逆に国内へ目を向けようと考えています。今、いろんな「日本的」なものが、すべからず国内で立ち枯れ状態に近くなっています。それは茶道の世界でも同じです。ですから今まで以上に、小さな町や遠方でもいわず現場へ足を運びたいと思っています。まず現状を見ることから始めていこうかと。机の上で考えても仕方ない、見なければ何もわかりませんから。それによって私の時代の枝葉が出てくるんじゃないでしょうか。

八田 日本文化の立ち枯れですか。特に若い方々の間でそういう状況があるかと思いますが、今後若い世代に対する、茶道をはじめとする伝統文化への取り組みについてはどのようにお考えですか。現在は、伝統文化が再び見直されています。「大学コンソーシアム京都」で、単位互換制度を利用して学生が受講している科目の中でも、伝統文化関係、特にお茶、お華などは人気があります。

千 私たちの世代で、すでに「日本的」というものに対する危機が叫ばれていました。それでも、住んでいる家は和風でした。だから「畳での作法は堅苦しい」ということもわかった上で、西洋的なものに憧れていましたね。ところが今の時代はどうでしょう。基本的に、普段の生活で畳を見ることは少なくなってきましたね。和室は、彼らにとっては「未知との遭遇」のような感じがします。それならば私が、自分が若い時に自分の友だちに感じたような目をそのまま今の若い人に向けてるのは、これもまた危険ではないかと思えます。私は学生時代にバンドをやっていましたが、やっている音楽は西洋のものでした。とくにボーカルが入れば、英語を使うことが多い。英語を使うと、

自分を日本というものから少し引き離せるんじゃないかという錯覚もありました。西洋コンプレックスがあったのだと思います。

さて、今の若い人たちに西洋コンプレックスがあるのかどうか。もう街の中には英語があふれているじゃありませんか。新聞を読んでも、何だかよくわからない言葉が飛び交っている。そういう中で今の若い人たちにはもう、西洋コンプレックスは格段に少ないと思うのです。私はあまりテレビを見ないのでわかりませんが、子どもたちが聞いている音楽をそばで聞いていると、日本語と英語がうまく混ざっていたり、リズムもメロディも和と洋がうまくクロスオーバーしていますね。それなら、若い人たちに向かって、着物を着て畳に座りなさいとか、楽器をするなら三味線で和の旋律を弾きなさいとか、日本的なことを学びなさいとか、そんなことを言うのは逆に不自然です。ですから、今こそ「ネオ・ジャパネスク」という動きをつくる、絶好の機会ではないかと思えます。また、今の時期をそう捉えなければいけないと思えますね。西洋コンプレックスがない分、彼らの中にある日本的なものが、コンプレックスに邪魔されずに自然に出てくるのではないか。和のものに対して拒否感をもつのではなく、温泉も日本酒も面白いやんかという自然な感覚ですね。かつて私たちの世代は、おしゃやかな雰囲気を感じるために、たとえばデイスコへ行かねばならなかった。この「うせねばならない」とか、日本的なものを否定すればすべておしゃれという概念などが、今の若い人にはないと思います。

八田 茶道においては、具体的にどのような若い世代に働きかけていくおつもりでしょうか。

千 茶道では最初にどういふところでどんな挨拶をしなければいけないなど、マナーがいろいろ定められています。ルールではなく、マナーですね。それらのマナーを契機に、言葉のやりとりをしながら、人間関係をより深いものにしていく心地良さ。それを茶道のいろいろな面から学んでいただける場をたくさん提供していきたいと考えています。今、現場を見ながら考えているところです。若い人の雰囲気をおわかつていくうちに、これらの点をどんどん修正していきたいと思っています。

八田 国際化社会といわれる現代だからこそ、日本のアイデンティティーや日本の伝統的なものを見直す気持ちですが、今の若い人たちの心の中に芽生えてきているのではないかと私も思います。そのなかでも京都に住んでいる若者は、お茶、お華などの伝統文化に接する機会が多いですから、有利な立場にいるわけです。そういう機会を、私たちも最大限に活用してもらいたいと考えています。その意味でも、家元の今後のご活躍に大いに期待しているところです。

千 ありがとうございます。いま先生がおっしゃったように、誰もがアイデンティティーというものを求めているというのは私も感じています。でも、アイデンティティーを求めているから日本的なものの目を向けようという概念はないと思うのです。私は日本的なものも西洋的なものも、同じ高さにあると考えています。たとえば私たち裏千家は海外普及に熱心ですが、それはなぜだと思われませんか。

八田 やはり、共通のものがあろうでしょうね。日本人にしかわからないものではなく、人間として共感するものがあるのでしょうか。



伝統文化への取り組み方、
同志社大学の今後について話が弾んだ

千 先ほど言いましたように、私たちは利休の根本精神は絶対に変えません。点前作法も変えません。それさえ変えずにいれば、そうですね、例えばそこに咲いている花の種が風に吹かれて、太平洋側まで行つたとしましょう。そこで新たに咲いた花は、私の家の庭に咲くその花の姿とは微妙に違うはずですが、色合いも違うでしょうし、太陽の当たり方によって咲き方が違う。お茶も同じだと思うのです。十五代目は茶道の海外普及に熱心でした。種を蒔いたのは父。でも水をやるのは現地の人、土壌管理も現地です。土壌が違えば、咲いた花は若干違いかもしれません。その「若干違う」のが面白いと思うし、また、私はそれでいいと思います。和敬清寂の精神さえ変えなければ、ですから茶道の国際交流というのは、茶道文化のもつ幅広い可能性を証明しているのだと私は思っています。



豊かな言葉を紡ぐ裏千家第16代家元

八田 花でも、土壌によって大きく成長するものとそうでないものがあるかと思いますが、その違いは何でしょうか。

千 国内外を問わず、それが育たなかったというのは、やはり周囲にいる人たちが油断するからでしょうね。なにも大きい花が咲くだけが「育つ」ことではなく、小さい花には小さい花なりの良さがあります。しかし先ほどお話にも出た「立ち枯れ状態」になるのは、あまりにも「そこにあるのが当たり前」だと思ってしまうからではないでしょうか。例えば先生方も講義ノートを持つて授業をされと思いますが。私も自分で作ったノートを見て教えることがあります。このノートを見てさえいけば間違いないと思っていると、ノートを見てしか教えられなくなります。そうではなく、ノートは基本。教えている時に大切なのは、ノートに書かれていない学生たちの顔、心ですよ。

茶道でも同じです。時代を見て教えていない、習いにくる人たちの気持ちに敏感になっていない、そういう教え方をしていると、先ほどの立ち枯れ状態になってしまうのだと思います。

茶人としての生き方にプラスになった心理学

八田 いま授業の話が出たところで、家元の学生時代のお話を伺えますか。文学部文化学科心理学専攻で学ばれましたね。

千 そうですね、まず一浪しましたので、入ったら周りは年下ばかり(笑)。でも心理学の勉強は面白かったですね。私にとっては、概念としての心理学でなく、実験心理学が学べたところが興味深かったです。心理学というのは概念的なものと実験的なものとが合わさっているとところが面白かった。私たちは「相手に対する心配りができなければ、いいお茶は点てられない」とずっと教わってきましたので、心理学を学んだことは茶道にも、とてもためになりました。心理学を学んでおられないお茶人さんと比べて有利な立場にあるのではないかと。これはおごって申しあげるのではなく、有利な立場にあるからこそ、もっともっと謙虚にしなければいけないと思っています。

八田 いつ頃から心理学を学ぼうと思っておられたのですか。

千 中学の頃から興味があつて、心理学などの心の本を読んでいたもので。ちよつと根暗だったんですね(笑)。

八田 大学時代、クラブ活動はしておられたのですか。ずつとお茶のお稽古もなさっていたんですね。

千 クラブはやっていませんでした。それに私が定期的にお稽古に出るようになったのは二十歳過ぎてからなのです。この

家にいること自体が「お茶」ですから。毎日利休御祖堂でお経をあげ、お茶をお供えし、その日お供えした物のお下がりを頂戴していたわけですから。その間も家の中では、朝から若い人たちがみな一所懸命に炭を入れたり、花を活けたり軸を用意していたりする。それを見ているのが、すべてお茶の勉強でした。禅語や絵も、読めないものが読めてくる、わからないものがないのまにか理解できてくる。花の名も自然に覚えます。

八田 そのような中でキリスト教主義の同志社大学に來られて、チャペルがあつたり、何か異質なものをお感じになつたことはありますか。

千 私チャペルに入つたことないんです(笑)。私は赤レンガの、今出川校地全体が、すでにして聖域という気がしてました。大木越しに見えるレンガの色に緑がちらちらと重なつて、そのたびに色が変わつて美しかったです。私はお寺の住職もしていませんが、私のような異端の人間でも、今出川の地に足を踏み入れたら神聖な気持ちになります。そういう神聖な場所だと思っていますし、それが同志社の良いところではないでしょうか。

同志社精神のさらなる啓蒙を

八田 同志社全体や同志社大学の学生・生徒に対して、何かご意見やご提言がございますか。

千 学内出身者は結束がとても固いですね。そんな中で、私のように大学だけに行つた者もいる。今後はますます同志社大学の卒業生が、「新島精神が」「同志社を出た人が」と、ひとつの言葉で語れる時代ではなくなつてくるのではないか。私は新

島襄の本を読みましたし、その精神に共感するものがあります。が、そういう「同志社精神」というキーワードで卒業生を束ねることが難しくなつていくのではないのでしょうか。ですからこの同志社精神を外部に對してではなく、むしろ内部に向けて上手に啓蒙していただく教職員が増えてほしいですね。しかも教条的なものではなく、新島先生がそうであられたように、広い心で同志社精神を啓蒙できるような方がいいですね。

八田 頭の痛いところではありますね。

千 茶道の世界でもそうなのです。利休の精神といえますけれど、これが広がれば広がるほど、そこに人間関係の問題が出てくる。立ち枯れ状態になつているところは、そういう人間関係の問題が原因です。それを解決するため、どこへでも行くと思つていきます。ただただ、この茶道というものを次の世代へ、きれいな状態で渡していきたい。ですから同志社の良さというものも、もつと伝えていきたいです。

八田 私たちの一番の喜びは、卒業生の皆さんが、お子さんをまた同志社に入学させてくださること。そんな卒業生がどんな出てくるような教育をしていきたいと思つています。

千 京田辺校地の開校で今出川キャンパスから学生が減り、私たちも寂しい気もしますが、これからは「京田辺キャンパスも今出川同様に同志社の聖地」と言われるよう、ますます京田辺を活性化してつていただきたいですね。

八田 本日はどうもありがとうございました。今後とも同志社に対するアドバイスをお願いいたします。

千 こちらこそありがとうございました。この、ほんなりとした同志社カラーが薄まらないように、ぜひお願いいたします。